

大陸のおさんドン

フ ラ ン ク

舞臺は廻りたり。わが名はフランク、吾はいまバ
グスト、カアヘイ、と云へるレストランドの一人
となりて働きにゆくところである。曉の幕まだ開
かれざるも、電燈書の如きブロードウエーの第八
街、流石の大通りも夢の衢のいともの静かに、無
人の樓臺まさには吾背景。

この寂莫の天地を車の音に破り來るはオークラン
ドトレビュンの小賣係、馬は十字の道にとゞまる
や否や、何處より掃さちらされし蜘蛛の子ぞ、バ
ラバラとかけよる新聞賣の小僧たち、また、くう
ちに各小脇にたばさみて、かなたにもこなたにも、

モーネンペーパーの呼聲たかし。
吾等のレストランドの門口に、何日の間にか先ん
じて來て居るは、附録のポンチ書にありさうなる

小僧、ねばけたる眼に吾を客と見あやまりて
か、モーネンペーパーとかけよりにて、相識れる吾
の笑ふのに、シヨゲかへり、御早やう倭奴などの
憎まれ口、御早やう米奴よと横ツラ一つはりとば
して、吾は扉を開いた。時計は六時に八分前、ハ
ロー、フランク、御早やうと云ふはヘンレイと云
ふ獨逸人、酒保人の小頭にて、五時より出勤して、
自分の口をお客様となし、御手前もの、ウキスキ
に、いつも今頃は上機嫌の男、不相似商賣御繁
昌ですナアと吾は冷やかしてゐるうしろから、ハ
ロー、フランクと手を握るはルイと云ふ澳大利人
歴史の中には王者と同じき名をもちながら、これ
はまたいかなることぞ、髻ひさぐるしく髪かきみ
だしたる一蒼夫、午前二時半よりこゝにつめかけ
て掃除萬端引きうけてゐる男、ことし五十七にて
孫は二人、一人は四歳、一人は八ヶ月と十五日と
か、前の日曜日七くどく問はずがたりせしこと
があつた。

急ぎわが身じまひの部屋にゆきて、上衣を脱しエ
 ブロンをつけ、かひがひしく腕環を引きしめ、か
 の酒保に出張した。六時を相圖につめかかると、か
 ヘンレイ荐りに怪辨を弄して、麥酒の賣方となつ
 てゐる。あちらにもこちらにも、酒盃を合はす音
 ありと思ふまに、皆立ち去りて、残るは吾とヘン
 レイのみである。

酒も呑み得ぬ意氣地なしのフランクよ。去つて庖
 厨にゆきミルクでもたらふく呑み來れとは、ヘン
 レイの挨拶である。厨夫長がこなくては、甘いも
 のもあるまいかと、吾は悠々として庖厨の方に
 かけて見る。

ヤー御早うとの日本語はY生と云へるわが友であ
 る。野菜方として働いてゐるのであるが、五時よ
 りつめかけて、ストーブに火をたきつけ、朝の
 働する人々に、珈琲やミルクなどを暖めてくれて
 居るのだ。ア、いんだ。エー糞ツ、九弗だ、しか
 たがないとは、わが友の口癖である。一週間九弗

の勞銀を得て居るからである。十一時間ばたらさ
 のわがタイムも、ケチンのほとりにて、十五分位
 ノンキに減らされて仕舞ふ。

朝早くくる客といふは、何れクラブの小集に徹夜
 したとか、かるた遊びに眠るのを忘れたとか、曰
 くづきの連中のみであるから、さまで多く酒保
 にすがり居ることはないヘンレイは新聞など讀み
 て、余裕綽々と云ふ有様、コックの來るのをまち
 かねて、貯肉室にかけつけ、もち來りし紅ひの一
 塊をストーブの上にならべ、こん畜生こん畜生、
 早く早くと、つつついてゐるのは、わがルイ老人
 である。ルイとヘンレイとは、客用のテーブルを圍
 みて且つ談じ且つ喫しゐるとき、吾は酒保にゆ
 きて、わが仕事をはじむるのだ。

唯見る酒保の臺の上。酒はながれて泉の如く蒔き
 ちらされしやうな數多の酒盃、これ等を拾ひあつ
 め洗ひきよむるはわが役目である。臺のうしろに
 は同じ長さの臺ありて、二つの水溜もあり流下も

あり、中央には麥酒の送り管は美々しく装置されて居る。

吾はとにかく臺上の酒盃をとりかたづけ長七間の臺を洗ひ去り、電燈の光りにこれを斜視して見る。まゝ、あちこちに班痕ある、あり合ふサイホンの口がねチヨト押し、音いさましき曹達水を撒きちらし、更らに新らしきタオルを動かして塵もといめずと磨くのである。次に麥酒の送管を試み、どの管が盡きてゐるか、どの酒はまだ充ちてゐるか、ヘンレイに報告するのだ。かくてのちギヤスリン仕立ての磨き粉にてその管五本の真鍮を、鏡の如く光らすのである。管のはとりの臺上には穴多き真鍮の板ありて、こぼれたるペアを洗して仕舞ふやうに出来てゐる。

これも磨かなくてははいけぬ。管の下はやはり真鍮の受容臺、その下は氷函、その兩脇には銅壺ならびて、數十本の酒瓶は、水のお燗いと冷かなりと云ふわけ、日本と丁度反對である。その銅壺の磨

きかたもわが領分、加ふるに大なる水溜二つ、これも銅にて出来た因果には、日ごと日ごとに磨かなくてはならぬ。これは御丁寧なる磨き粉では間に合はぬ。硝子器を悉く洗ひ了りたるのち、外の種類の磨粉には水に粗刷毛、急がしくヤツつけることにしてゐる。いかにあせりても磨きかたのみ三十分にてすまぬ。ア、この手が、この手かと、癢にさわつてたまらぬが、早仕舞しては光澤なく、光澤なければいと癢だ。

ヘンレイはと見は、わがうしろにありて、姿見鏡を磨いてゐる。二間に五尺位の一枚もの、短身の彼は蹈み臺あふなげに、背を丸くして一生懸命だ。ながき冬の夜もそろそろ明けかけて、わが労働の友どちはそれぞれ出勤した。八時二十分前までは、酒保の開放の有様、ヘンレイ得意となりて、酒を振舞ふてゐる。人心を收攬するはまさにこの時と云ふ顔つき、支配人の来るまでは、ヘンレイの氣宇王侯の如しである。

廚夫長チャーレイ堯爾としてやつてきた。まづ一杯とグラスをつきつけしヘンレイ、今日は支配人のくるに間もない。早く早くと促がすのである。忙はしく汲み乾して、出勤簿に署名せるチャーレイ、更らに一杯のウキスキーを請求するのである例のことゝて笑つてその杯に充たしてやると、名残惜しさうにして酒盃を臺の上のこし、白衣白帽のゴックのすがたとなりて来る。更らに改めて一杯と云ふとき、咳一咳入り来るは支配人キヤツスルである。チャーレイはいつの間にか去つて見へず。

キヤツスルも獨逸人である。余は彼を曹孟徳と字名してゐる。稚き時見たる三國誌、その北齋の筆の面影によく似てゐるからである。豪傑肌の男にて、その禿頭とその眼光とその破鐘のやうな聲とは、一種の威嚴を添へる。ヘンレイはもはや酒の接待は出来ぬ。吾を扶けてグラスを拭ふてゐる。大小の酒盃、その種類のみにて五十余、その數

二千個を下らず、一時間ばかりのうちにこれを悉く拭ひ、それぞれの棚に安排し、酒瓶の棚の塵を拂ひて支配人の検査を待つてゐる。帳場を開き、金庫を開き、計算器を整理してのち、支配人は酒保に來り、今日賣りいだすべき酒の目録を書きて余に渡すは常、八時後に余は櫛下の倉庫係より一々これを受とつて來ねばならぬ。

酒保の飾りづけも余の役目である。この國の食品は滋養を主としてゐるためか、日本のやうな見麗はしきは少ない。しかし飲料は中々美しい。硝子瓶の形いろいろなるさへもの珍らしきに、琥珀の色、瑪瑙の液、何れも玲瓏透徹見るからに氣もちがよい。草頭の露ほども呑むなどの佛戒の重ければ、吾は点滴も舌に上ぼしたることなけれど、意匠を競ふペーパーと、精製を誇る酒の色にはいつもうれしき想ひした。味をつけるための香料と糖液にも、いろいろありて、瑠璃のやうなるあり晴れたる空の如し藍色濃かきあり、眞紅の寶石を

とかしたるにあらざるかと疑はるゝあり、若草の色そのまゝなるあり、菜の花の黄金色にもさも似たるあり、丁子の香、回香の匂ひ、各種の菓汁の香と交りて、室にたゞよふ酒精の雲、洋々として人を酔はさずんばやまずとの慨、加ふるに礦泉水の幾種、曹達水の二三種、下戸の足をも留むるに足る。吾は密漬の櫻實に紅ひ鮮かなをとりいでし、玻璃に鍍金せる器に盛り、臺上二三ヶ所にならべ、配するにオリブの緑眼もあやなるを以てし、スプーンの銀樹をその間に植え、橙、檸檬のスライスをとるところどころに山を築き、東洋流の熱酒を好むものゝためには、ギヤスの火上に銀器、湯をたぎらし、松風の音つねに絶へず、卵したての杜松酒あり、ラム酒あり、望みに従つて汝の枯腸を潤ふさん、來れ、天下の酔餓鬼まで、八時と共に吾は酒保を去るのである。

段をくだりて倉庫にゆけば、メローと云へる肥大漢、シガーをくばへて悠々椅子に座してゐる。吾

は支配人の命をつたへて、各種の酒を請求すれど、中々に立ちあがらぬ。マア急がずともよい、話せ話せとノンキなもの、吾はかれを董卓と字名してゐる。中々の横着もの、出来るかぎりは手足を動かさぬやうにしてゐる。

口だけは中々よく働く。ラランク、君は見たどころ力もありさうもない。學生だらふ。甘くわたつたか。苟も讀書する位ならフレンチが出来なくてどうする、わしを見なさい、本國のジャマンは云ふまでもなく、伊太利は出来る、英語はこの通り、ことにフレンチは大得意だ、ぞチツト教へてやらうか。余は云ふ。だまれ。隣國の言葉位に通ぜぬ阿呆はどこにあるか、私だとして、支那語と朝鮮語とは御手のものサ、さゝ玉へと、史記の滑稽傳の一條を朗讀し、これが支那語サ、それからと、蒙求の標題を棒讀みにしてきかせ、これが朝鮮語、とうだ恐れ入つたかと、彼呆然、爾後フレンチを説かざること久し。

酒保と倉庫との間に電話線を通じてゐるので、フランクとフランクとヘンレイの聲。君はまだその肥大漢の駄法螺を拜聴してゐたのだらふ、早くもツて来てくれなくてはこまるよと、オーライ、よしきたと、それからは大汗になりて十回ばかり階段を上下するわけ、時計は八時半を過ぎてゐる。南無三寶、今日は少し遅いぞと自ら叱りとはして、急ぎ用意するはおさんの武器、雑巾とバケツそれにて食堂を掃持をするのだ。酒保を角にして廣く展開した椅子テーブルの散兵線吾は飛ぶが如く駆け廻りて拭ひ淨むるのである。こゝは並等のお客様のために設けたところ、外に紳士むきの一室はある。通りみちをへだてて酒保と對してゐるこゝには獨逸風の獵具、喇叭、陣がさ、剝製の鹿、古武器、舊式の銃など飾りつけてゐる。外に一寸と密談でもしながらバクツかうと云ふ商人輩のために狭き三個のルームがある。これでお仕舞かと思へば中々さうではない。酒保のうしろには前記

の總坪位の大食堂がのさばつてゐる。正面には奏樂機械は据えつけられて、電氣作用にて隨時にさくことが出来る。蓄音機寫聲器のやうな小さな音ではない。劇場のと少しもかはらぬ。合奏の鳴ものは十余種位もあるだらふ。一曲ごとに紙腔琴のやうに譜の巻紙を挿入するやうに出来てゐる。入口らケツチンまで隈なく響くのである。屋内の柱ごとにお賽錢の函を供へ、誰れにてもあれニロールをそれに投ずるを、合奏がはじまるのだ。こゝには造花あり彫像ありオイルカーツトは床の上に百花をちらし、ギヤスと電燈と天井に幾多の月輪を懸く、こゝは抑も誰れのために設けたるところぞ、ふるアメリカの高等人種、髪ながくして智恵短かく、裳のながきは氣の短かさに反比例と云ふ、説明むつかしき女性と云へるものために設備し奉りてゐるので、今フランクはその椅子テーブルを拂拭し奉つてゐるのだ。